

るの は な

千葉大学医学部同窓会報 第68号 題字 鈴木 五郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

るの は な 同 窓 会 報 編 集 部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係 気付

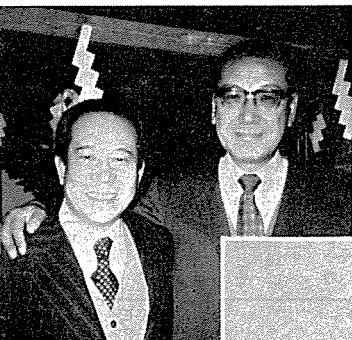
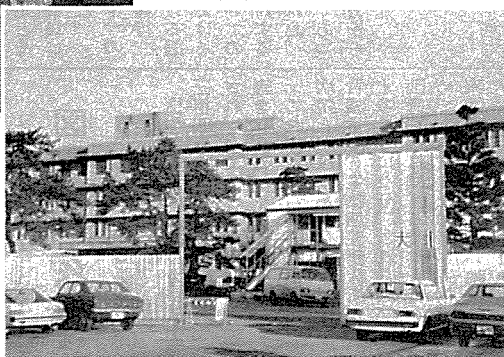
電話千葉(0472)22-7171 内線2012

旧病院改修工事はじまる

「田の字」の衣がえ

旧病院の教育研究棟への改修がいよいよ軌道に乗り、去る十二月二十六日入札が行なわれ、大林組他に落札され、総工費十九億五千万円程で向う二年以内に移転を目ざして着工された。一月二十二日には、旧病院玄関ホールにて、井出医学部長、佐藤病院長をはじめ矢尾施設部長他の本部関係者、施工者その他、学内各位多数の出席を得て盛大な起工式が挙行された。旧病院はすでに工事用の塀にとりかこまれ、雑音がたはじめ、先輩諸先生にはなつかしいわゆる「田の字」の病院の衣がえが緒についた。

旧病院の周囲はすでに工事用の塀でかこまれ、前庭には飯場ができています。
(昭和54年2月2日撮影)



↑起工式場の
井出医学部長(左)
佐藤病院長(右)
(昭和54年1月22日)

工事はまず「田の字」の東南四分の一を改修し、そこに臨床研究室の大部分が一時移転し、残り四分の三の工事に移るのは盛夏の頃となろう。工期は昭和五十四年度内となつてはいるが、着工の遅れもあり、実際には来年度、あるいは初秋の頃に完了、基礎研究室の移転を終えあたらしい歯車がまわり出すものと思われる。

堀越達郎教授(歯科口腔外科学)

最終講義行なわれる

昭和三十八年助教として本学に着任、四十一年七月教授就任以来十三年にわたり歯科口腔外科学教室を主宰して来られた堀越達郎教授は、本年度をもって定年退官されるが、二月二十一日午後、附属病院第一講堂にて「言語機能回復を主とする口蓋裂の治療」と題

千葉大学評議会、都市モノレール問題に回答す

千葉市都市モノレール建設問題については、昨年新聞紙上にさまざまな形で報道され、医学部との関係が目まぐるしく変化したが、千葉大学評議会はこの問題を正式に採り上げ、慎重審議の結果次のような毅然たる回答を香月学長名により松井市長に手交した。

千大庶第一三九二号
昭和五十三年十二月二十六日

院長改選期となる

縮切、確定
◆二月二十三日 不在者投票開始
◆二月二十六日 予備選挙、候補適任者確定、本選挙、候補者確定

県、千葉市の本計画担当の方々から詳細な計画内容の提示を求めながら、本学においては、本学の整備計画、将来計画に關与する各審議機構において検討のうえ、更に部局長会議の審議を経て大学管理機関である評議会に諮りました。本学としてはご提示の計画案に含まれる千葉大学亥鼻地区の校地割譲については応じられないとの結論に達しました。

日頃、教育の重要性を認識され、その施設整備、環境保全に力を入れておられる貴職が、千葉県における唯一の国立大学として発展整備に努力を重ねていく本学に対する今回の甚だ唐突な提案は、その真意の奈辺にあるやに疑問をもち、また、大学の使命に対する認識の欠如を感じざるをえません。

地域と大学との関連、地域における交通機関の重要性については、本職も深く関心をもつものでありますが、その点をふまればこそ、一層今回の立案、計画案の提示については、遺憾の意を表明せざるをえません。

将来、本計画の変更等についても、十分慎重に対処されることを希望します。

東京ゐのはな会 新年宴会

昭和五十四年一月二十七日(土)、神田の「もとみや」で頭書の新年宴会が開かれた。役員改選により中村比古(昭13卒)新会長になってから初めての会であり、大学より伊藤、本間、岡本、平山四教授、厚生省より山中環境衛生局長が出席、約七十名の参加を得て盛会であった。

会長より新年の挨拶、伊藤教授より学内外の諸問題についての報告、本間教授より学術会議選挙についての協力についての謝意の表明のあと、学術会議で「学問の独創性と先見性」についての論議が

昭和五十四年度 予算内示される

予 算 内 示 さ れ る

一月中旬、来年度の概算要求事のうち、つぎの各項が予算化された。文部省よりの内示があった。本学部では、旧病院を改修し研究教育棟とする工事に二年度に亘る経費がすでに大幅に計上されている関係で、大きな予算化はなかった。

①脳機能研究施設の部門名が、向神経薬研究部から神経薬理研究部と改称(予算なし)。

②医学部附属動物実験施設に運営費が若干与えられる。

③附属病院の薬剤部の整備、教授一がみとめられる。

好評であった。

なお改選後の副会長はつぎの各氏である。黒部信夫(昭11卒)、清川素道(昭16卒)、内藤徹郎(昭22卒)、今井力(昭22卒)、伊藤藤一(昭23卒)、鍋谷欣市(昭27卒)。

図書館「亥鼻分館」について

萩原弥四郎教授(昭23卒) 初代分館長に

医学部の附属図書館が昭和五十三年四月から「亥鼻分館」と改称され、今まではやや異なつた形態を取ることとなった。

これは亥鼻台上に医学部と附属病院とだけあった時代と代つて、看護学部、生物活性研究所が同居するようになり、これら四部局の図書利用に関する業務を行なうためであり、また将来「生物医学情報図書館」として広い地域のセンター的役割を果そうという構想に基いたものである。

形式的には西千葉にある千葉大学附属図書館の分館ということになるが、分館長、事務長ほか三係があつて、実質的には独立して亥鼻地区の図書管理とサービスに当るものである。分館長は四部局長会議によって選任されることとなっているため、看護学部や活性研から選出されることもありうるが、当分は蔵書も利用者も最も多い医学部から選ばれるのが常識的で、初代分館長には脳研の萩原教授が就任した。

医学部図書館時代には、事務的

杏林大学附属図書館長に

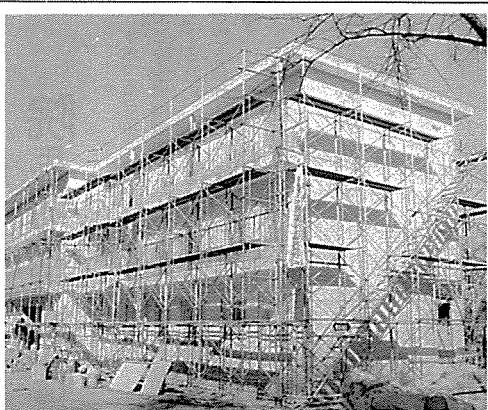
渡部士郎教授(杏林大学生理学・昭26卒) 就任す

渡部教授は昭和五十三年四月一日付をもって杏林大学附属図書館長に就任、併せて同大学評議員の要職を果していられる。杏林大学には他に鍋谷欣市教授(第二外科・昭27卒)が国家試験特別研修委員長として臨床教育面で多大の貢献をしており、また麻酔科の神山守人教授(昭32卒)がまさに中堅教授として活躍中である。なお助

るので、先輩各位でご希望があれば、学内の者を介して申し込まれば利用可能である。このことに関する受付は、亥鼻分館運用係五十嵐(内線二八〇七)である。また一般的な図書の利用、文献複写等は「階カウンター(内線二八〇八)、図書の寄贈等は整理係(内線二八〇五)へご連絡いただきたい。

さて旧病院の研究教育棟への改築に伴い、数十万冊に及ぶ蔵書

学生寮完成近し



亥鼻キャンパスの整備計画の一環の中で、この写真のような医学部学生寮の建築が進められている。もとの精神科の裏庭辺りに相当し、先輩方になつかしいかつての精神科講堂はすでに取りこわされた。

(写真は54年1月20日撮影。金子教授提供)

教授には関隆氏(薬理学・昭24卒)、花岡建夫氏(第二外科・昭33卒)らがいる。

杏林大学では、現在八王子地区にある教養課程を三鷹地区に移して専門課程と統合し、六年間の一貫教育を企図しているという。

肺癌研究施設

創立二十周年を祝う

第十三回肺癌研究施設例会(第六〇一回千葉医学会例会)は同研究施設の創立二十周年を記念して一月二十七日午前十時より附属病院第一講堂において盛大に行なわれた。記念講演として東北大学名誉教授・鈴木千賀志博士が「肺癌研究施設創立二十周年を祝して」と題して心をこめた講演をされた。なお座長は香月学長自らつとめられた。

共通一次試験

実施される

一月十三日は雪であった。十四日はまれに見る晴天であった。この二日にわたって今回初めての試みである国立大学共通一次試験が行なわれた。まさに明暗を分ける大事な試験であり、全国一斉ということで、一力所不祥事があつてもならないため、準備、警備等厳重を極めたが、幸い無事終了した。

本学での受験生は約八千人、本学部の受持は七百人程で、例年に比べて欠席者の少ない事が特長であった。このような多肢選択による試験方式の結果の出るのは数年以上先のことになるが、問題の安易さからみて、泰山鳴動して一匹の感を免れないとは、監督に当った教官、事務官諸氏の声であった。



春 浅 き 凡 秋 谷

郊外の雑木の森の
それぞれにやわらかい
木の葉の色が
遠い記憶の なにかの絵のように
夕日を浴び
こんもり 混じりあっている
.....
(清岡卓行「西へ」より)

書 評

インターフェロン

—その基礎と臨床応用—

ティレル著 桑田次男 布施晃 共訳

インターフェロンについての関心が高まってきた折から、微生物学の桑田教授、布施助手の共訳になる本書が、共立出版株式会社のモダンバイオロジーシリーズの一冊として出版されたのはよろこばしい。

原著者はイギリスのインターフェロン研究委員会の委員長であるが、緒言に、詳細な専門書にしようとは意図しなかったことを述べ明快な解説を試みた。その意を受けた訳者達の筆は、まことに流麗で、共訳にありがちなぎこちなさは全くなく、美事な統一が示さ

書 評

胆道X線診断学

監修 足立忠博士(東京医歯大・名誉教授) 編集 窪田博吉博士(昭和20年卒)・亀田治男博士(東京慈恵医大・教授)になるB5版三六二頁・ライトブルーの表紙の胆道X線診断学が、このほど南江堂より出版された。執筆者は窪田氏のほか、大藤正雄・大野孝則・和賀井和栄・大原啓介・羽生富士夫・高田忠敬氏ら15名の努力のあとがあらわれている。内容は総説・各種胆道造影法施行の実際・治療方針決定とX線検査・逆行性胆管造影法・経皮経肝胆道造影法・血管造影法・X線撮影技術まで、すべてが網羅されている。序言に自分の経験から読み出ているようなものが欲しいと述べられているが、まさにそれに近い内容となっているように思われる。立派なまごとな写真も数多く掲載されており、学生・実地臨床家・放射線技師等にもよい伴侶となろう。定価一万二千元。

書 評

小児の脳神経外科学

ティレル著 山浦 晶 訳 牧野博安監修

療への応用という風に組み立てられた内容は、訳者達が加えた丁寧な補註の力もあって一読に値する本となっている。A5版一三四頁、一六〇〇円。
なお一九七六年以降の文献は訳者らの手によりつけ加えられている配慮の細かさがある。一昨年の秋、しばらくベルギーに行かれた桑田教授がその滞在中に筆をおこされたというあとがきも印象的である。

Kenneth T. Trill の Paediatric Neurosurgery — for paediatricians and neurosurgeons が篠原出版から訳著となって出版された。訳著者および監修者はともに、本学医学部脳神経外科の講師および教授である。

原著者はつねに小児科医と一緒に働いている脳神経外科医で、そのような立場にいる人にして初めて可能な困難さ、重要さを小児に対する愛情をこめ、豊富な経験をもちにわかりやすくまとめたものである。訳著者は一九七三年にティレル教授のもとで小児脳神経外科学を学ぶ機会を得、その縁で本書翻訳を手がけることとなり、C Tスキヤンの項を設けるなどについてのアドバイスも行なっている。

本文は頭蓋内腫瘍、頭蓋内感染、小児期の頭部外傷、水頭症、乳児期硬膜下液貯留および硬膜下血腫、頭蓋形状の異常・頭蓋早期癒合症、脊髄癒合不全症、脊髄腫瘍、脳神経外科に関連したその他の小児科的疾患、家族と重篤な子供、神経放射線学の十一章に分けられ、付録として日本語版への原

第25回日本生理科学連合講演会 開催される

昭和五十三年十一月二十五日後、病院第一講堂でこの講演会は開催され、幹事本間三郎教授が本田良行教授と協力され「肺ガス交換の生理学及び病態生理学」の主題のもとにオーガナイズされた。講演者は、本田良行(千大・第二生理)、滝島任(佐々木英忠(東北大・内科)、佐川弥之助(京大・胸研)、山林一(東海大・内科)の各氏で、充実した講演会となった。

白幡静夫、窪田静夫両先生に

医療功労賞贈られる

山村、辺地、離島など恵まれない医療環境の医療にたずさわる人々に贈られる讀賣新聞社主催、厚生省他協賛の第六回医療功労賞に千葉県下より白幡、窪田両先生が選ばれ、一月二十日表彰状と記念品がおくられた。

白幡静夫先生(昭13卒)は、館山市北条の開業医として地方の人たちの健康管理、とくに、胃癌の集団検診、農夫症の問題に取り組み、地域医療の発展に貢献され、その業績が認められたもの。先生は二十三年館山で開業、医師会の検診活動の一つとして全国に先がけて胃癌検診車による集検を行ない、館山市内の胃癌死亡者を四割も減少させたというすばらしい成果を得られた。

窪田静夫先生(昭17卒)は夷隅千葉大学医学部

千葉大学医学部
附属病院星野ひ
で看護部長受賞

星野氏はこのたび保健婦助産婦看護法施行30周年を記念して、優良看護関係者として、厚生大臣より表彰された。なお同氏は古くから本学附属病院看護婦として、活躍されており、小児科婦長・看護学校教務主任等を経て、現在看護部長として重責を果たしている。

人事異動

一、教授昇任
伊藤 進氏(第一内科講師、昭和26年卒)―埼玉医科大学内科教授に。
石川 孝氏(耳鼻咽喉科助教授、昭和35年卒)―熊本大学耳鼻咽喉科助教授に。
金沢正昭氏(歯科口腔外科助教授)―東日本学園大学歯学部教授に。
一、助教昇任
門田 健氏(大阪大学講師、昭和34年卒)―薬理学助教授に。

合同句集「やはぎ」
出版記念会開催される

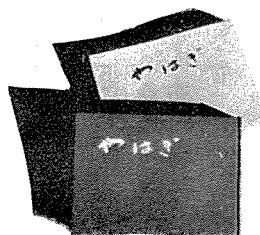
古い伝統をもつやはぎ会の会員による合同句集「やはぎ」の上梓を祝って、一月二十日ほいでい屋にて出版記念会が盛大に開催された。会員を代表し、村山さとし氏(賀、昭26卒)の挨拶、萩原季葉氏(弥、昭23卒)の発声による乾盃に続き、県俳句作家協会の柴田白葉女会長、同協会顧問、ニューナラヤ会長の杉本北穂氏、和歌を詠まれる本学微生物の桑田次男教授(昭19卒)はじめ多くの来賓の祝辞があった。亘邇水氏(威、昭19卒卒)、山本松花氏(野実、昭19卒卒)によりやはぎ創立当時の苦心が語られる等、終始なごやかな会であった。同夜の句会での作品より数句を拾ってみる。
シクラメン いま多花を蕾一書成る

昭和53年6月16日

12月31日

佐藤研一氏(歯科口腔外科講師、昭和35年卒)
岡本達也氏(肺研第一臨床・講師、昭和33年卒)(後転任・後記)
伊藤勇夫氏(東京大学農学部助手)―動物実験施設助教授に。
森 正敬氏(第二生化学助手、京都大学昭和40年卒)
小川道一氏(第三内科講師、昭和31年卒)
井上 敬氏(神経精神科講師、昭和32年卒)

阪口頼男氏(産婦人科助手、昭和38年卒)―千葉大学教育学部に。
一、講師昇任
若新政史氏(第一内科助手、昭和38年卒)
富田善身氏(微生物学助手、東京教育大学理学部昭和42年卒)
長谷川洋機氏(麻酔科助手、昭和43年卒)
久賀克也氏(第二外科助手、昭和37年卒)―人工腎臓部に。
河野守正氏(脳外科助手、昭和39年卒)
滝沢弘隆氏(肺研第二臨床・助手、昭和40年卒)
梶田 隆氏(肺研第二臨床・助手、京都府立医大昭和40年卒)
結束 温氏(耳鼻咽喉科助手、昭和46年卒)
一、転任
長谷川正博氏(肺研第二臨床・講師、昭和28年卒)佐倉市にて開業
岡本達也氏(肺研第一臨床・助教授)千葉労災病院外科に。
緑川 隆氏(神経精神科講師、昭和38年卒)開業
金子 勇氏(環境疫学研究施設講師、昭和33年卒)―阿南町和合富草診療所に。
平賀一陽氏(麻酔科講師、昭和42年卒)―国立がんセンターに。
なお四家正一郎氏(昭和26年卒)東邦大学小児科助教授より金沢医科大学小児科教授に昇任された。



合同句集「やはぎ」

開会を待つやはぎ会員たち



編集後記

松井卓治・大正元年卒・昭和53年11月12日死去・飯田市上飯田七六一七番地三(羽場十一区上二)
昭和30年より43年まで飯田市長、飯田市名誉市民、行年90才。

●僅かに四頁のこの会報でも、編集を仕上げる夜はきまづて徹夜になります。昨夜は節分の豆まきをしました。もう私のように大きな声を出して「福は内」とやるのは近所にはないようですが、柵に目刺しの頭をさして玄関に飾り、息子と二人で思い切り声を出しました。理屈ぬきで何かさっぱりし、今立春の暁を迎えているわけです。たわいもないことを軽んじてはいけないと思っています。

●本号の編集も、萩原弥四郎、金子敏郎、奥井勝二、増田善昭、斎藤弘といった先生方の絶大なお力添えで出来上りました。(村山智)

同窓会本部へのご連絡はなるべく月・水・金の昼間、同窓会事務係 村瀬さん(記念講堂内)・電・内線二〇二二に願います。月・水・金以外の緊急のご連絡は、医学部庶務係 井深さん(内線二〇〇四)にして下さい。

次号(六九号)は四月末に発行の予定です。

計 報